

図書館だより

目次

図書館統計を読む	—島崎 恒藏	1
日本女子大学叢書の紹介		
村上祐介著『教育行政の政治学』	—村上 祐介	2
田中雅文著『ボランティア活動とおとなの学び』		
	—田中 雅文	3
『The Kelmscott Chaucer : a census』について		
	—川端 康雄	4
知の要	—細田梨花子	5
あなたの一冊を見つけよう	—中野 愛海	5
図書館★ポイント利用案内		6
お茶の水女子大学附属図書館と		
日本女子大学図書館との相互利用協定について		8



上代タノ平和文庫展示風景（西生田）

図書館統計を読む

島崎 恒藏

学術情報基盤実態調査などをもとに判断すれば、本学の図書館は蔵書数において比較的恵まれた図書館といえる。それでは「どの程度の書籍を所蔵し、毎年、どの程度の図書購入費が確保されているのか」などの具体的な点になると、学園の構成員といえども簡単には答えられないのではないかと推察される。また図書館の入館者数などの実績についても、多分、予想しがたいデータのの一つといえるのであろう。

最新（本稿執筆時）の平成22年度実績でいえば、本学図書館は目白・西生田両図書館を合わせて80万7千冊の蔵書と、和洋合わせて1万9千種を超える雑誌を所蔵している。各学科で購入する図書とは別に、図書館で直接購入した図書費用は1億2百万円を少し超える水準にある。図書館の入館者数については、目白では、平成13年度に152,151人（1日平均632人）であったものが、平成19年度の84,355人（平均327人）まで単調に減少を続けた後に底を打ち、平成22年度は107,740人（平均413人）まで回復してきている。それでも平成13年度の入館者数は、22年度よりも、なんと約50%も多い水準にある。西生田では、平成13年度に81,445人（1日平均343人）であったものが、平成19年度の44,193人（平均183人）まで単調に減少を続けた後に底を打ち、平成22年度は54,725人（平均209人）まで回復しており、目白と同様の傾向を示している。このような入館者数の推移の背景については、教学面からじっくり調査をしてみる価値はありそうだし、図書館としても注視すべき重要なデータと考える。

本学の図書館だけで利用者のすべてのニーズを満たすことができればよいが、実際には不可能なので、他の図書館との間でILL（Interlibrary Loan：図書館間相互貸借）などにより補完するシステムも存在する。必要に応じて、他の図書館へ紹介状を発行したり、逆に受け入れたりすることも図書館の業務である。また平成22年度には、目白・西生田両図書館の間では2,100件を超える図書の相互利用があった。

以上のような本学図書館の現況や利用実績は、学園における図書館の存在意義のみならず問題点をも映し出す鏡のようなものである。このような図書館統計は、大学のホームページからも、ある程度までは閲覧可能であるので、ご覧いただければと思う。きっと本学図書館の新たな面に触れることができるのではないかと考える。

（図書館長・被服学科教授）

村上祐介著

『教育行政の政治学

—教育委員会制度の改革と実態に関する実証的研究—』(日本女子大学叢書10)

村上 祐介

本書の目的は、戦後日本の教育行政に関して、通説と異なる知見を実証的に提示することにある。

これまで、教育行政は他の分野に比べて縦割り性・集権性が強い領域であるという印象を持って語られることが多かった。その原因として、教育委員会制度の存在が批判の対象となってきた。1948年に創設された教委制度は、教育行政の地方分権、一般行政からの独立、民衆統制を目的に導入されたしくみである。当初は教育委員を住民の直接選挙により選出していたが、政治的事情の変化もあって、1956年に教育委員を首長の任命とするしくみとなった。その後、首長から相対的に独立した行政委員会という基本的性格は変わることなく現在に至っている。

他方で、教委制度はその形骸化や機能不全が指摘され、教育行政の強力な縦割り集権構造をもたらしたとされてきた。本書ではこうした「定説」を「縦割り集権モデル」であると述べた。「文科省—都道府県教委—市町村教委—学校という上意下達の縦割りの教育行政」という批判は、政治・行政やマスコミの世界でもしばしば見かけるものである。現実の教育改革論議においても、この種のステレオタイプの理解は広く共有されている。たとえば、最近の大阪府・市の教育基本条例制定をめぐる動きも、教委制度の存在が教育行政の縦割り性を強めており、首長・議会による教育行政への民主的関与や民意の反映を妨げてきたという現状理解に基づいているといえる。

しかし、こうした現状認識は実は法制度的な理解や印象論に基づくもので、実証分析による検証を経たものではない。従来の「通説」的見解は、戦後日本の教育行政の実態を適切に理解しているのであろうか。学術的な意義はもちろんであるが、現実の制度改革にとっても実態がどうなっているのか、現在の制度のいかなる点が問題なのかを正しく理解しなければ、適切な処方箋や改革案を立案し、実行に移すことは非常に難しい。さらに言えば、「想定外」の帰結を招きかねない。

そこで本書では、以下の2点の課題を設定して分析を行った。第1に、教委制度の存在が教育行政の縦割り性・集権性を強めてきたとする通説的見解を再検討した。第2に、教委制度がなぜ現在まで続いてきたのかという問いを分析した。従来は、制度改革すなわち制度変化に焦点が当てられてきた。反面、教委制度がなぜ存続したのかという制度安定の問いは等閑視されてきた。教委制度に対する批判は以前から強かったが、なぜ最近になって教委廃止・見直し論が台頭したのだろうか。

この課題を解明するため、本書では制度改革の政治過程分析、自治体教育行政において最も影響力を持つとされる教育長の人事の実態、知事・市町村長への質問紙調査の分析を行った。

その結果、以下の知見が得られた。第1に、実証分析を通じて、教育行政では潜在的な場合も少なくなかったが、首長や議会の影響力は小さくないことが明らかとなった。たとえば首長への質問紙調査からは、教育長と首長の影響力が大きいとの認識であったが、教育長は首長の意図通りに選任されており、首長は教育長人事等を通じて教育行政に影響力を発揮していることがわかった。

第2に、教委制度が存続してきた背景として、従来は文科省や政権与党の影響力が強調されてきた。それに対して本書では、首長にとっても教委制度を維持することが最近までは政治的に合理的な選択であったことを明らかにした。最近の教委廃止・見直し論の背景としては、教委制度それ自体の問題というよりは、むしろ首長や議会などの地方政治家にとって教委制度の存在が政治的に無用化したことがより重要であることを指摘した。

以上の結果から、本書では通説的とされてきた「縦割り集権モデル」よりも、教育行政の縦割り性・集権性は他の行政領域と大きく異ならないとみる「総合行政モデル」が、戦後日本の教育行政に関する様々な現象をより適切に説明できるとの結論を導いた。

2000年代以降、教育行政と政治との関係が鋭く問われると同時に、教委制度の在り方についてもその存廃を含めて根本的な疑問が投げかけられている。本書の知見が現代の教育行政における政治の役割や位置づけを考える手がかりとなれば幸いである。

(教育学科准教授)

田中雅文著

『ボランティア活動とおとなの学び—自己と社会の循環的發展—』

(日本女子大学叢書11)

田中 雅文

再帰的近代化 (reflexive modernization) の進行が指摘される現代においては、リスク回避と新しい社会の形成を目指した「創造型ボランティア活動」といえるような活動が広がっている。そのような活動のなかで、「ボランティアが、具体的な人間関係や活動の体験と成果からはね返り(再帰)によって、自らの世界観やアイデンティティを獲得する」という自己形成の効果も期待される。こうした自己形成と社会形成は、ボランティア活動が醸成する公共空間を媒介として、弁証法的に発展する可能性をもっている。いわば、自己の再帰的変容と社会の再帰的な変容が、相互に影響を及ぼしながら進行するというわけである。本書では、このような過程を<自己と社会の再帰的変容>と呼ぶ。

ところで、上記のようなボランティア活動を通じた自己形成は、レイヴとウェンガーによる「状況的学習」(situated learning)の過程にはかならない。一方、新しい社会の形成には最先端の知識・価値観・技術等の学習が必須であり、このような学習は活動や生活とは分離して一定の時間と空間を確保して行われるため、非状況的学習と呼ぶことができる。つまり、ボランティア活動を通じた自己形成と社会形成をとらえるためには、学習論からのアプローチが必要となる。

本書は上記の背景をふまえ、現代におけるボランティア活動が<自己と社会の再帰的変容>を促進する可能性を分析するとともに、そこにおける状況的学習と非状況的学習の役割を明らかにすることを目的とするものである。このようなテーマに関する実証的な先行研究はほとんどない。

本書では、研究目的の達成のために、四つの研究課題を設定した。それは、社会形成を通じたボランティアの自己形成(研究課題1)、学習活動とボランティア活動の連鎖及び自己形成との関係(同2)、NPO活動における学習促進と社会形成との関係(同3)、ボランティア組織による社会教育施設の運営が社会形成に及ぼす影響(同4)である。方法論としては、個人(ボランティア、学習者)と組織(NPO、ボランティア組織)を対象に質的調査と量的調査を行い、そこから得たデータの実証分析を通して新たな知見を生み出すことを試みた。

四つの研究課題を分析した結果、本書では次の結論を得た。第1に、ボランティア活動が<自己と社会の再帰的変容>を促進すること、そこでの自己形成の過程は「自己形成と社会形成を再帰的につないで循環的な発展を促す」という意味で<再帰型学習>と表現できるような一種の状況的学習であること、そのようなメカニズムを非状況的学習としての学習活動が強化することを、確認することができた。第2に、これらが現実となるような場を提供する社会的装置として、NPOが重要な役割を担っていることが明らかになった。とくに行政との協力関係に基づく社会形成の活動がその傾向を強めていること、行政との関係のもち方がNPOのタイプによって異なるために自己形成への影響も多様であることが推察できた。第3に、NPOやボランティア組織の提供する学習事業は新規のボランティアの参入を促し、そうした人たちをも<自己と社会の再帰的変容>の世界に引き入れていく可能性が確認できた。ただし、条件次第では既存のボランティアだけの閉鎖的な世界が維持されることもあり、本書では<参加の陥穽>(参加の促進が十分に達成されなかったり、新たな支配・排除を招いたりすること)の観点からその分岐点の検討が必要であることを見出した。

上記の結論を得た本書の主な成果は、自己と社会の相互関係の学習論的解明が課題となっていた成人学習論に対して新たな地平をひらくことができたこと、再帰的近代化論やボランティア研究といった社会学の関連領域と成人学習論を接続する役割を果たしたことなどである。今後の課題としては、<再帰型学習>のモデルの精緻化、個人単位と組織単位の分析を同じフィールドで行うことなどがあげられる。

(教育学科教授)

William S. Peterson & Sylvia Holton Peterson,

『*The Kelmscott Chaucer: a census*』(New Castle, De.: Oak Knoll Press, 2011)について

川端 康雄

イギリス19世紀の装飾デザイナー、ウィリアム・モリス(1834-96年)が晩年に設立した私家版印刷工房ケルムスコット・プレスの53点の刊本のなかでも、『ケルムスコット・チョーサー』こと『チョーサー作品集』(*The Works of Geoffrey Chaucer*, 1896)は、活版印刷の歴史のなかでも特筆すべき書物とされる。モリス自身がデザインした活字体、装飾頭文字、縁飾り等のオーナメント、それに画家エドワード・バーン＝ジョーンズ(1833-98年)による木口木版挿絵87点を手漉き紙の本文用紙に刷った564頁の2折版は、「すべての印刷本のなかでも最も美しい」と詩人W・B・イェイツに言わしめているように、刊行直後から高い評価を得て今日に至っている。

『ケルムスコット・チョーサー』は紙刷本が425部、ヴェラム刷本が13部製作された。それぞれが誰によって買われ、その後所蔵者がどのように変わって今に至っているか。絵画の巨匠による一枚の名画について、その来歴(provenance)が美術史家によって詳細に調べられることはあっても、複製芸術である印刷本について、その一冊一冊について調査するというのは珍しいことであろう。この本は例外的にその調査を行うに値するほどの文化史的な価値を有するのであり、書誌学者、蒐集家、古書店業者などはかねがねそうしたデータを渴望してきたと思われる。それにしても、当該の書物は英米に留まらず、世界各国に所蔵者が拡散しており、調査は相当に骨が折れる。それを成し遂げたのがピータースン夫妻による本書である。ウィリアム・S・ピーターソンは編著モリス『理想の書物』(1982年、日本語版:川端康雄訳、晶文社、1992年)、『ケルムスコット・プレス書誌』(1984年)、『ケルムスコット・プレス』(1991年、日本語版:湊典子訳、平凡社、1994年)などによって、モリスとケルムスコット・プレスの研究では当代きっての第一人者といっている。

本書で紙刷本のすべての所在がつきとめられたわけではなく、判明したのは281冊、およそ3分の2ほどであるが、それらについて、現在の所蔵先のみならず、装幀等の特記事項について詳細に記述し、所有者の変遷を記録している。歴代の所有者の略歴が記されているのもありがたい。また、ヴェラム刷りの特別版15冊のすべてについて、その数奇な運命を初めて明らかにしている。

『ケルムスコット・チョーサー』は日本にも少なからずある。本書では本学所蔵の1冊を含めて、大学図書館や美術館など21の機関で23冊、個人所有で2冊、併せて25冊がリストアップされている。私の気づいた限りでも数点が漏れているので(たとえば国立国会図書館所蔵の1冊が抜け落ちている)、実際にはもう少し(おそらく30冊程度は)国内にあると思われる。なかでも興味深い来歴は東京大学総合図書館所蔵のものであろう。これは1923(大正12)年の関東大震災で同館が火災に遭い、蔵書75万冊の大半が灰燼に帰する大被害を受けたことに対して、英国政府が同情を示し、1929(昭和4)年5月に外相チェンバレンの名において松平大使を経て寄贈した稀観本の1冊なのだった。そのあたりのことも、本書には説明されている。

日本女子大学図書館が所蔵する1冊も(カタログ番号2.87として)載っている。来歴を見ると、以前の所有者は米国のSamuel and Marie Louise Rosenthal夫妻だったとのこと。夫君のほうはシカゴの弁護士で、愛書家団体キャクストン・クラブの会長を歴任、またグロリア・クラブにも1994年に95歳で没するまで所属していた。夫人が2003年に亡くなり、遺産相続の際に遺族がこれを処分したのであろう。2005年にロンドンの古書市でHeritage Book Shopから出品されたのをJoseph Lehrer(ロンドン在住の書物蒐集家)が購入。それが2009年に再度Heritage Book Shopに売却され、そこを介して(カタログには記載されていないが最終的には紀伊國屋書店を経由して)日本女子大学に入った。そこにはこの1冊が“gift from Japan Women's University Izumikai, an organization of parents of undergraduate students, 2010”(「在学生の親の組織である日本女子大学泉会からの2010年の寄贈」)であると正しく説明されている。(英文学科教授)

*所蔵: 図書館目白第一参考 請求記号 Bib016.821-C49

知の要

細田 梨花子

私は、大学生活の4年間というのは社会に出て行く前に与えられた自己の人間形成のための猶予期間であると考えています。先生や友人といった「人」との出会いや「学問」との出会い等の経験を通して、卒業後の長い人生を生きる上で必要となる様々な資質を身に着ける場所が大学です。その大学での学びを支える重要なツールの一つに図書館があります。

私が図書館を頻繁に利用するようになったのは2年生になってからです。利用カードは作ったものの、「大学図書館はなんだか自分には敷居が高いもの」というイメージが強かったせいか、1年生の頃は図書館を利用することはほとんどありませんでした。しかし今では、私が図書館を利用しない日はありません。なぜ1年生の頃からもっとたくさん利用していなかったのだろうととても後悔しています。

図書館によく足を運ぶようになったきっかけは、2年生から司書課程を履修し始めたことと図書館でアルバイトをし始めたことでした。また、3年生になってからはゼミが始まったこともあり、閉館時間ギリギリまで図書館に籠って文献を探したり、発表資料を作成したりするようになりました。春からは4年生になるので、今度は卒業論文の作成が待っています。また図書館に籠って、様々な文献と対峙しながら論文作成に励みたいと思います。

図書館はいつも同じ場所であなただが来館するのを待っています。まずは図書館を「利用」してみてください。そして、徐々に図書館を「活用」できるようになってください。大学図書館を制する者は大学生生活を制します。それに、図書館で一生懸命勉強した思い出なんて今しか作れないですよ。私のような後悔をしないように、利用カードを作ったその日から図書館を利用しましょう。一回も利用することなく卒業するなんてことにはならないように、ガイダンスや講習には自ら積極的に参加して、思う存分図書館を使い倒して卒業してくださいね。

(家政経済学科・3年次学生)



あなたの一冊を見つけよう

中野 愛海

西生田図書館は緑に囲まれ、晴れた日には柔らかな日差しが入り込んでくる落ち着きのあるところ。2階のゲートを入るとすぐのところには雑誌や新聞を読むことができるスペースがあり、私もよく旅の雑誌を読んだりしてのんびりしています。とても居心地がよくついつい時間を忘れて読み入ってしまいます。その傍らにはパソコンも設置されており、レポートを仕上げることもできます。貸し出しカウンターの近くには「学生が読みたい本」コーナーがあり、学生がリクエストをして選ばれて入った本が置いてあるのでぜひ見てみてください。

1階には映像資料を見るスペースや沢山の文献や雑誌のバックナンバーが入った書庫があります。3階は主に和書があり、4階には小説や洋書があります。最初は学術書が苦手な私はとても近寄りたかったのですが、よく見てみるとタイトルが面白くて手に取ってしまいたくなる本や綺麗な図版などさまざまなジャンルの本がたくさんあります。また、大学にはレポートがつきものなので図書館は欠かせません。1階から4階まで学習スペースも充実しています。レポートを書いたり、読書をしたり学生はおもいおもいに図書館を利用しています。心地の良い沈黙が流れていて、ゆったりするには丁度いいところだと思います。皆さんも大学生生活を充実させるためにも自分の“図書館の楽しみ方”を見つけてみてください。「学術書とか難しい本は苦手!」と思ってしまう人もいるかもしれませんが、ぜひ図書館へ行ってみてください。驚くほどたくさんの本の中にあなたに読んでもらうことを今か今かと待っている、運命の一冊があるかもしれませんよ。

(文化学科・2年次学生)

図書館★ポイント利用案内

～日本女子大学図書館をいつもあなたの側に～

日本女子大学図書館は目白・西生田両キャンパスにあります。本学の学生・教職員・卒業生・その他利用資格をお持ちの方は、両館を利用することができます。まずは頻繁に足を運んでいただき、お気に入りの場所を見つけてみてください。学習・研究に必要な資料収集に備え、日頃から図書館利用に慣れておくことが大切です。

☆利用カードはいつも携帯しましょう☆



入館・貸出には、利用カード（両館共通）が必要です。学生証を持参の上、カウンターで利用カードの交付を受けてください。利用カードは登録した本人のみ有効です。入館、貸出、貸出中圖書の予約、倉庫委託資料の取り寄せ、目白・西生田図書館間の資料取り寄せ・取り置きをするには、利用カードが必要です。

！注意！

1日でも1冊でも返却の遅れている図書があると、新たな貸出ができません。図書を延滞すると、延滞した日数分だけ、貸出停止になります。

☆「図書館のしおり」を読んでみましょう☆

新入生の方には入学時資料として「図書館のしおり」を配付しています。図書館内にも備えてありますので、ご自由にお取りください。また、図書館ホームページの利用案内 (<http://www.lib.jwu.ac.jp/lib/UG.html>) にも PDF 版が掲載されています。どうぞ、ご利用ください。



☆図書館ホームページ(<http://www.lib.jwu.ac.jp/>)を隅々まで見てみましょう☆



図書館ホームページは、インターネット環境があれば、どこからでもアクセスできます。開館日程、各種お知らせ、図書・雑誌の探し方など情報がたくさん掲載されているとともに、蔵書検索・情報検索の窓口になっています。

なお、携帯サイト (<http://www.lib.jwu.ac.jp/mobileopac>) でも、一部の機能をご利用になることができます。

☆資料の探し方☆

この図書館は開架式です。図書・雑誌を書架で直接手に取り見ることができます。目的の資料を利用するだけでなく、様々な分野の資料群の中を歩いてみることをおすすめします。思いがけない発見があるかもしれません。

資料は、和書、洋書、雑誌・年鑑類、参考図書、大型本など、その性質や形態によってまとめて置かれています。また、同じ主題（テーマ）が集まるよう、和書は日本十進分類法（NDC）、洋書はデューイ十進分類法（DDC）により分類され、書架に並んでいます。

なお、和装本、AV 資料（視聴覚資料）など、一部の資料についてはスタッフが出納いたします。利用をご希望の場合は、カウンターまでお申し出ください。

♪ OPAC(Online Public Access Catalog)を使いこなすには♪

OPAC での検索により、本学の蔵書（目白地区蔵書の 1990 年 4 月以降受け入れのもの、及び全洋雑誌、西生田地区の全蔵書）とその配置場所を調べることができます（1990 年 3 月以前に受け入れた目白地区の蔵書については順次データ入力中）。

図書館ホームページトップの **OPAC** をクリックすると下の画面に移動します。OPAC の使い方は、メニューの **操作手引** または各ページ右上にある **！利用方法** をクリックすると表示されます。



♪ 便利な My JWULIS(マイ ジュリス)♪

My JWULIS は図書館が提供するオンライン・サービスで、利用状況確認や貸出更新、検索式・検索結果の保存ができる自分のページです。図書館ホームページの **My JWULIS** からご利用ください。

♪ 図書館開催の講習会を受けましょう♪

資料の探し方やデータベースに関する講習会は、図書館利用における重要なエッセンスをぎゅつと濃縮して詰め込んでいます。ふるってご参加ください。

♪ 必要な資料が見つからない時は参考係に相談しましょう♪

参考係は、皆さんが必要とする文献や情報を探し出すサポートをしています。

そのほか、図書館利用、資料の探し方でわからないことがある時には遠慮なくスタッフに尋ねてください。皆さんの積極的な図書館のご利用を心よりお待ちしております！

「学生が読みたい本」のご案内

大学図書館に初めて足を踏み入れた方は、「今まで利用した公共図書館や高校の図書館とは、ずいぶん雰囲気や蔵書の内容が違う」と思われるでしょう。大学図書館は大学での研究を支えるための学術機関ですから、蔵書構成も他の図書館とは異なります。

しかし、授業や研究の合間に大学図書館でちょっと気持ちを休めたり、楽しんだりしたい……そんな声を受けて、図書館では毎年「学生が読みたい本」というイベントを行い、学生の皆さんが、今、興味を持っている話題の実用書、気軽に読める小説などのリクエストを受け付けています。（雑誌やコミック、試験問題集などは受付対象外です）

2011年度は 6 月 1～8 日と 11 月 1～8 日に募集を行い、前期・後期合わせて目白 135 件、西生田 112 件の応募がありました。購入された図書は背に「学生が読みたい本」のシールを貼り、専用の書架に配架されています。2012 年度の開催に関しては、図書館ホームページや館内掲示にてお知らせしますのでご覧ください。

なお、研究のために必要な図書の購入に関しては、常時参考係にて受け付けています。ぜひご相談ください。



(図書館だより編集委員会)



お茶の水女子大学附属図書館と 日本女子大学図書館との相互利用協定について

日本女子大学図書館は、お茶の水女子大学附属図書館と相互利用協定を締結しました(2011年11月1日施行)。

協定の調印式は、両大学の図書館長および図書館員が出席して2011年10月21日(金)にお茶の水女子大学において執り行われました。

日本女子大学の学生・教職員は、本学発行の学生証または教職員証を提示することにより、お茶の水女子大学附属図書館の利用(資料閲覧)ができるようになりました。

この協定は、図書館間相互利用協定としては学習院大学に続き2校目の協定となります。運用中の他大学との協定を下記の表にてご紹介します。各協定がより活発な学習・研究に役立つことを願っています。



調印式にて

(右・鷹野景子お茶の水女子大学附属図書館長
左・島崎恒藏日本女子大学図書館長)

	図書館間相互利用協定		f - Campus (5大学単位互換制度)
協定校	学習院大学図書館	お茶の水女子大学 附属図書館	学習院大学, 学習院女子大学 立教大学, 早稲田大学
対象者	本学発行の学生証・教職員証所持者		f - Campus 受講証を 所持する学生
サービス 内容	館内閲覧, 複写 図書の貸出	館内閲覧, 複写	館内閲覧, 複写

* 詳細は、図書館ホームページ「協定校利用案内」をご覧ください。

* 各図書館の規則・マナーを守って利用しましょう。



図書館(目白・西生田) 玄関ホール展示のお知らせ

2月13日(月)より、目白では「図書館を探検しよう! 2012」、西生田では「上代タノ平和文庫創設40周年記念展」を開催しています。西生田の展示では、目白で開催した同展示(2011年10月~12月)のうち一部の資料を展示しています。



編集後記 本学図書館の概況は、学校法人日本女子大学 HP-「SR(本学の取り組み)」-「点検・評価への取り組み」に掲載の「日本女子大学点検・評価報告書」、「大学基礎データ」をご覧ください。また、大学 HP-「情報の公開」、図書館 HP-「図書館概要」にも基礎データを掲載し、学内ネットではより細かな統計をお知らせしている。卒業と入学の季節。新入生はまずは気軽に図書館に立ち寄り利用に慣れていきましょう。卒業生、退職される専任教職員も図書館の利用が可能、ぜひご再訪を。(中曽根)